

# 継続調査でも農薬成分検出

地下水研究会

## 水道水調査結果を報告

市内で採取した水道水から微量の農薬成分が検出された件で、宮古島地下水研究会(前里和洋、新城竜一、友利直樹共同代表)は、そ

の後の継続調査でもネオニコチノイド系とフェニルピラゾール系の農薬成分が検出されていると報告した。



調査結果を報告する友利さん(左)と前里さん=30日、県農業共済組合宮古支所

30日に県農業共済組合宮古支所で会見した同会は「複合汚染の危機。慢性暴露による子供たちの健康への影響が懸念される」と改めて警鐘を鳴らした。検出後、市が「基準より大幅に低く微量なので安全」とした点について「安全と安心は、科学的根拠と信頼が必須」と批判した。

調査は2021年、咲田川湧き水や保良ガ1、平良下里の水道水など計10カ所で実施。主にサトウキビに用いられる農薬の成分が検出された。同会は水道水について22年6月から毎月、平良下里(袖山浄水系)と城辺長間(加治道浄水系)でモニタリング調査を継続している。同11月までの調

査で、いずれの場所からもクロチアニジン、ジノテフランが毎月検出されているといい「複合汚染が確実に始まっている」との考えを示す。同会では来年5月まで調査を継続する。

EUなどヨーロッパでは農薬の使用基準が年々、厳しくなっている。同会は「日本は逆行している」と批判。「宮古島はすべての水を地下水に頼っている特異な地域。地下水に入り込んでしまえば、取り除くのに1400年かかると言われている。持続可能な農業のためにも、予防原則に立って、影響が出る前に対策を取る必要がある」と訴えた。

宮古毎日新聞

2023年(令和5年)1月31日 火曜日